NEWS LINER

気候変動で蛾による食害拡大 有機農業の対応策を模索する

■農水省の事業を活用して札幌で研修会を開催

トウモロコシ栽培をテーマにした道内の有機農業団体による合同研修会が1月20日、札幌市内の北海道大学キャンパスで開かれた。

幼虫がトウモロコシの茎や穂の中に侵入して芯や実を食べ荒らし、収量低下などを引き起こす蛾の一種「アワノメイガ」が、気候変動の影響による環境変化によって増えている事態を受け、生産現場からの事例報告などを基に対応策を探った。

農林水産省の「有機農業新規参入促進事業」の枠組みを活用し、これからの有機農業に必要な技術や経営ノウハウを共有しあう催しで、昨秋の前回研修会では、千歳市内の有機農場でドローンや自動操舵などスマート農業の実装現場を見学済み。今回もまた、北海道有機農協やMOA自然農法文化事業団など4団体でつくるチームが企画し、石狩管内の農業関係者ら60人余りが参加した。

講師の農研機構中央農業研究センター上級研究員の石島力さんがアワノメイガの生態や発生状況、防除方法などについて解説したあと、事例報告が行なわれた。

石狩市内で有機野菜づくりのかたわら直売所を営む「はるきちオーガニックファーム」の小林卓也さんは、夏場の花形作物としてトウモロコシを出荷・販売している。

「長期間にわたって収穫するようにしていますが、近年、アワノメイガの食害がジワジワ増えてきた。お盆ころまでは発生せず、それ以降に9割ほどのトウモロコシに被害が出たこともあります」などと報告。

千歳市にある地球(ガイア)農場の南亘さんは、販売収支などのデータを示しながら、有機栽培向けの防除法について、こう紹介した。

「生育の促進と病気を防ぐため有機にも使える防除資材をドローンを使って散布している。メリットは(ドローンから降りてくる)風によってトウモロコシの受粉が促進され、先端部の不稔を軽減できることです」

栗山町の種苗会社「タネショウシードコンサルタント」の水谷澄人さんは、近年のトウモロコシの栽培では、アワノメイガなど蛾による食害以外にも、高温傾向によって萎びたり、先端部が実らない現象が起きている事例を紹介。気候変動に対応した品種選定などを助言した。

石狩管内の有機農業関係者を中心に60人余りが参加した

参加者との質疑の中では、食害をおよぼす、さまざまな蛾の生態に関する質問が相次ぎ、野菜類の被害事例の紹介などが続いた。

「キツネやアライグマに食べられるので、今はトウモロコシを作っていないが、生分解マルチ(微生物の働きで水と二酸化炭素に分解される環境に優しい農業用フィルム)の情報がほしい。3年ほど前からトマトキバガ(アメリカ原産の農業害虫)が来るようになったが、どうすると防げるのか」(新篠津村の有機農家)といった声もあり、講師や報告者が丁寧に対応策を説明。気候変動や生態系の変化にともなう食害対策や防除資材の活用などについて、農閑期にじっくり問題意識を深める場になっていた。

※2月17日午後1時30分から、農水省の促進事業の一環で「有機農業セミナー」が北大学術交流会館で開かれる。同大大学院農学研究院の小林国之准教授の基調講演と有機農家や赤井川村の担当者らの事例報告などを予定。参加費は無料。問い合わせは北海道農政事務所(☎：011・330・8807)まで。

(ルポライター・滝川 康治)

PDF版